

酪農場での実践を通して学ぶ 新教育方式

酪農学園大学紀要 第31巻第1号（人文・社会科学編）より転載

酪農場での実践を通して学ぶ新教育方式 「実践酪農学コース」の特徴と課題

干場 信司*・新名 正勝**・猫本 健司***

Characteristics and problems of the practical dairy science course, the new education system learning through practical exercises in a dairy farm

Shinji HOSHIBA*, Masakatsu NIINA** and Kenji NEKOMOTO***
(June 2006)

1. はじめに

酪農学科では、2004年度より、酪農場での実践を通して学ぶ新しい教育方式である「実践酪農学コース」を新たに開設しており、現在、3年目を向かえている。本論文は、この「実践酪農学コース」のねらいを明らかにするとともに、3年目の現時点までの状況と、これまでに明らかになった課題について整理したものである。

2. 「実践酪農学コース」のねらい

1) 実学教育のこれまでの取り組み

学園創立者の黒澤酉蔵は、「酪農学園の歴史と使命」¹⁾の中で、「有為な人材を農村へ送り出すのが本学園の使命」と述べている。この「有為な人材」とは、上述した「三愛精神」、「健土健民」、「循環農法」で表わされる本学の建学の精神・理念を体得した人材のことであり、そのために本学では古くから、実学教育として、酪農家に住み込んで行う3週間の実習を、必修科目として現在、「酪農実習II」をカリキュラムの中に入れていた。これは、現在注目されている「インターンシップ」にあたるものである。短期間ではあるが生活の場を生産農場に置き、農業の実態、農作業や農家生活の体験、農業者の意識や経営哲学等を学んできた。この取組は昭和36年に始まり、現在まで既に40年程の歴史を有している。受け入れ農家の多くは本学卒業生で、後輩の実学教育に理解と協力を示しており、卒業生の協力の上に成り立つシステムである。

参考までに昨年度の状況を表1に示した。毎年約500名の学生が約350戸の生産者農場に出向き、3週間の実習を体験しているが、アンケートによる学生の評価は高く、95%の学生は実習成果があったと回答している。

2) 実践酪農学コースとは

(1) 「実践酪農学コース」を企画した理由とコースの目的

上述した3週間の農家実習により、学生は極めて大きなインパクトを受け、数多くの学生が4年間の学生生活の中で最も印象の強かったものとして、この「委託実習」をあげている。しかし、3週間では酪農家が行う年間を通じての作業や生活を学ぶことは難しく、卒業後に即戦力として酪農を担うまでには至らないという課題も抱えていた。

また、現在、酪農技術は専門化・細分化しており、大学において、例えば受精卵移植や搾乳ロボットなどいわゆる近代的技術を個別に学ぶことは可能であるが、実際に酪農家が行っている業としての総合的・システマ的な技術やそれを支える考え方・視点を学ぶことは難しかった。

この総合化された技術およびその視点を学ぶためには、学内における座学だけでなく実際の現場で体を動かしながら学ぶ実践の機会を持つこと、しかも、座学と実践が交互にあることが更に教育効果を高めるものと考え、取組を企画した。これはデンマークにおける後継者教育システムに習ったものである²⁾。

* 酪農学園大学酪農学部酪農学科家畜管理学研究室
Department of Dairy Science, Farm Animal Management, Rakuno Gakuen University, 069-8501, Hokkaido, Japan

** 酪農学園大学酪農学部酪農学科実践酪農学研究室
Department of Dairy Science, Practical Dairy Science, Rakuno Gakuen University, 069-8501, Hokkaido, Japan

***酪農学園大学大学院酪農学研究所
Graduate Course of Dairy Science, Rakuno Gakuen University, 069-8501, Hokkaido, Japan

図1に示したように、在学4年間の内、トータルで約1年間を酪農家で実践をしながら学び、本学の建学の精神・理念を体得し、即戦力となる人材を4年間で養成することが本取組の目的である。

(2) 大学の理念との連関性

「三愛精神」、「健土健民」、「循環農法」で表される本学の建学の精神・理念を体得するためには、学内で講義を受ける座学だけではなく、農業・酪農の現場で体を動かしながら、牛や土やえさに触れながら、また自然溢れる農村で生活を共にしながら、体験的に実感を通して学ぶ必要がある。このような体験を経て、また、それを座学でブラッシュアップすることで、本学の使命である「有為な人材を農村へ送り出す」ことを可能にしようとするものである。

(3) 「実践酪農学コース」の特色

- a. まず1年前期に実施する「実践酪農学」で、現場の指導者や優れた酪農家による話題提供とその後のディスカッションにより、新1年生に現場の状況をわかりやすく認識させる。また、1年後期に実施する「実践酪農学演習」では、次年度の農家研修に向けて、実作業の目的と意味を理解させるとともに、可能なものは予備体験をさせる。また、機器の取り扱いを習熟させ、スムーズに遠隔授業が遂行出来る体制を整える。
- b. 2年前期には、現地の酪農家に入り、電子メールを利用した遠隔授業と現地集中講義（教員が赴き、酪農家にも協力してもらいながら実

施)の併用により、現場の状況を踏まえた実学教育を実施する。

- c. このように学内における座学と酪農の現場における実践（2年前期と3年後期）を交互に実施する新教育方式（サンドイッチ方式、図1）により、学生の授業に対する意識を高めるとともに現場技術に対する理論的把握が出来るようにする。
- d. さらに、大学教員と現場との接点が多くなることにより、教員が直接あるいは学生を通して、現場に情報を伝えるだけではなく、教員も現場の技術や問題点に触れてそこから学ぶという、双方向の交流が可能となり、教員が行う講義の内容を現場に根ざしたものにすることが出来る。

3) 取組みの準備

1999年10月に行われた酪農学園常任理事会のヒヤリングに端を発しているが、その後、大学と高校との連携を図ることを目的とした学園教育委員会連携部会でも検討がなされた。本大学酪農学部全体の問題であるが、本大学設立時から存続する唯一の学科である酪農学科で先行的に検討を進めることとなった。

酪農学科内では3年5ヶ月にわたり検討を行った。その間、ワーキング・グループ（教員6名）による打ち合わせを13回、学科会議での検討を11回行った。

また、大学酪農学科および短期大学部酪農学科の在学生に対して、このような新教育方式に対する意見を聞くアンケートを実施した。その結果は、回答者602名の内、約80%の学生が学年にかかわらず「とても興味ある」あるいは「興味ある」と答えており、この新教育方式で学びたいとする学生も50%を超えていた（図2、3参照）。

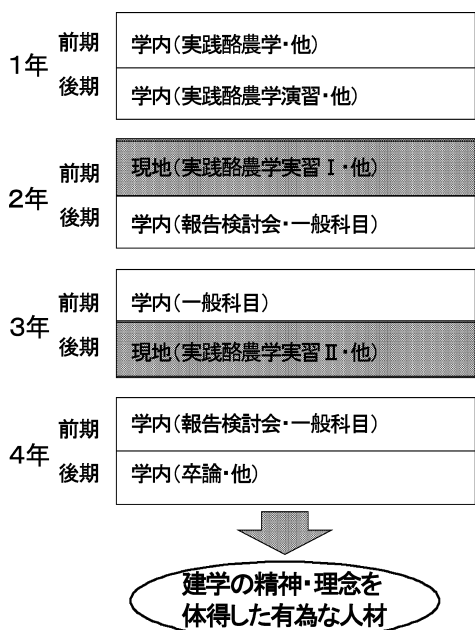


図1 新教育方式の概念図

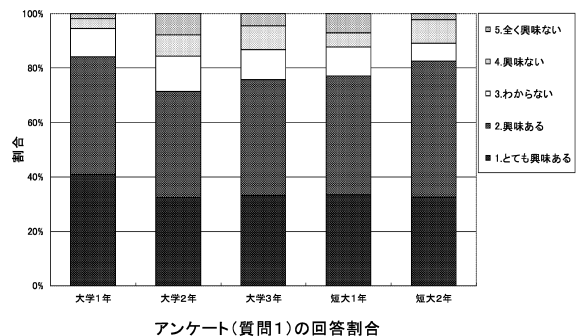


図2 学生に対するアンケート結果：質問1「このようなコースに興味があるか？」

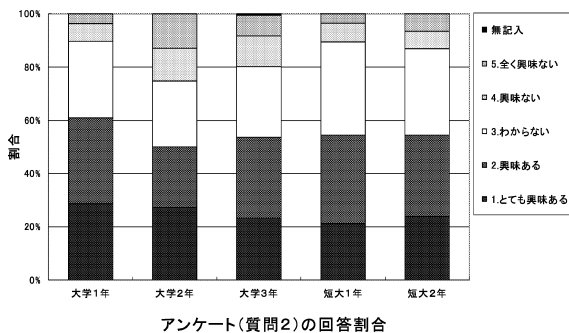


図3 学生に対するアンケート結果：質問2「このようなコースに入学したいと思うか？」

さらに、酪農学科で方針を定めた後、大学の教務委員会で3回にわたり検討し、酪農学部教授会・全学教授会を経て、全学的な合意を得た。

4) 期待される有効性

(1) 新たな試みに期待される効果

この新教育方式は、循環型農業を基本とする建学の精神を修得した人材と、農業後継者として即戦力となる人材の養成を目的としている。前者は環境調和型農業を推進し、消費者からも支持される酪農産業の発展に寄与する人材の育成であり、後者は農家戸数の急減の中で、後継者不在を理由として離農する農場を引き継ぐ人材の養成である。

特に後者の対応は緊急を要している。各地で後継者不在による離農が数多く生じており、離農の進行によって集落機能が著しく低下した事例が見受けられる。今やこれらの農場を引き継ぐ人材の養成は農業における最重点課題となっており、新教育方式の推進によってこの対応が一部ではあるが可能になると思われる。

(2) 教育効果を測定する評価方法

今回の取組に対しての教育効果の評価方法には、短期的なものや長期的なものがある。短期的な評価方法は、即戦力をもつ後継者として必要な知識、技術、情報をしっかり身につけることができたかどうか問われる。現地実践期間を終えた後に検討会・報告会を開催し、電子メールを用いた遠隔授業によって、予想していた教育効果が現れていたかどうか、その内容や進め方が適正であったかどうかについて、学生と担当教員による内部評価を行うと共に、実習農場での仕事ぶり、生活態度等を含めて、新教育方式に対する地元農協、協力農家等からの外部評価を受ける。そこで指摘された種々の問題点に関し、整理を行い、引き続き行われる学内での学習にその結果を生かすとともに、その後の現地実習にフィー

ドバックする。

一方、長期的には後継者として営農展開をする経緯で外部評価を受け続ける。経営成果はもとより、地域への多面的貢献度が評価対象となるため、一定の期間を経て評価される。短期評価における検討会、報告会にこれを加えることで、教育効果の評価とそれに基づいた教育方式の改善が期待できる。

(3) 教員も現場から学ぶ

酪農家で実践をしながら学んでいる学生を通して、また、教員自身が集中講義等で現場に入り、酪農家や農協職員と話し合う機会を通して、教員も沢山のことを学ぶことが出来ると思われる。そして、そのことが、本学の基本でもある「地に足の着いた教育」に繋がるものと考えられる。

3. 実施状況

1) 「実践酪農学」および「実践酪農学演習」の講義内容と履修者

2004・2005年度に行われた「実践酪農学」および「実践酪農学演習」の講義内容を表1、表2に示す。1年前期に実施した「実践酪農学」の13回中11回は学外からの講師で、そのうち6回は酪農家、5回は農業協同組合や担い手養成組織等の職員であった。履修者は2004年度が73名、2005年度が149名であった。特に酪農家を講師に迎えた際には、正規の履修者(酪農学科1年生)の他に他学科・他学年の学生や大学教員も出席していた。また、1年後期の「実践酪農学演習」は、2年生前期の「酪農家における実践学習」への参加を希望する学生約20名(規定人数、実際は2004年度22名、2005年度21名)を対象として、学内教員により実施した。

2) 「実践酪農学演習」を履修した学生に対するアンケート調査

1年後期に「実践酪農学演習」を履修した21名の学生の中で、2年生前期の「酪農家における実践学習」に参加した学生は、最終的に2004年度が5名、2005年度が7名であった。

2004年度の後期終了時に、「実践酪農学演習」を履修した学生に対し、「実践酪農学コース」に関するアンケートを実施し、18名の学生から回答を得た。その結果、「実践酪農学」についての感想は、「非常に良かった」が9名、「良かった」が8名、「普通」が1名であり、また「実践酪農学演習」についての感想は、「非常に良かった」が10名、「良かった」が7名、無回答が1名であった。総合的に「実践酪農学コース」をどのように思うかとの質問に対しては、

表1-1 「実践酪農学」授業内容（2004年度）

週	月・日	講義テーマ	講師名	主な内容
1	4.20	実践酪農学の経緯と抱負 わが国の畜産事情と課題	酪農大 干場・新名	1. 実践酪農学コースとは 2. 授業計画と過疎地域の事例
2	4.27	農業後継者支援策	道担い手センター 野村 貞	1. 農業後継者への支援策 2. 新規就農に向けて
3	5.11	牧場の設計手順	中央会 船本末雄	1. 牧場開設にあたって考えること 2. 経営シミュレーション
4	5.18	農業技術体系について	酪農大 新名正勝	1. 北海道酪農の現状と課題 2. 予備知識の整理
5	5.25	畜産専業地帯	JA浜中町 野田哲治	1. 浜中町の酪農 2. 浜中町における酪農支援策
6	6. 1	畑作・畜産地帯	JA鹿追町 中野松雄	1. 鹿追町の酪農 2. 鹿追町における酪農支援策
7	6. 8	都市近郊型畜産地帯	サツラク 野名辰二	1. サツラクとは 2. 牛乳の流通について
8	6.15	放牧酪農事例	足寄町 佐藤智好	1. 放牧酪農 2. 佐藤牧場の歩み
9	6.22	法人経営事例	卯原内生産組合 高岡 勉	1. 法人経営とは 2. 卯原内酪農生産組合
10	6.29	加工・直販事例	帯広市 広瀬文彦	1. 教育ファームとは 2. 乳製品の加工販売
11	7. 6	加工・直販事例	江別市 町村末吉	1. 卯原内酪農生産法人の歩み 2. 法人経営の担い手
12	7.13	共同混合飼料取り組み事例	恵庭市ミクセス 村上隆彦	1. 農業後継者への支援策 2. 新規就農に向けて
13	7.20	都市近郊酪農事例	江別市 中田和孝	1. 乳牛の改良 2. 中田牧場の歩み

注) 場所：C10教室。16：20～17：50

表1-2 「実践酪農学」授業内容（2005年度）

週	月・日	講義テーマ	講師名	主な内容
1	4.19	実践酪農学ガイダンス	酪農大 干場・新名	1. 実践酪農学コースとは 2. 授業計画と過疎地域の事例
2	4.26	酪農の現状	酪農大 新名正勝	1. 北海道酪農の現状と課題 2. 予備知識の整理
3	5.10	放牧酪農について	足寄町 佐藤智好	1. 放牧酪農の実態 2. 条件、経済性、労働性
4	5.17	教育ファームについて	帯広市 広瀬文彦	1. 広瀬牧場の歩み 2. 教育ファームとは
5	5.24	専門農協の取組	サツラク 野名辰二	1. 畜産専門農協の取組 2. これからの活動
6	5.31	都市近郊の放牧酪農	江別市 百瀬誠記	1. 百瀬牧場の歩み 2. 生活を重視した酪農経営
7	6. 7	今後の酪農地域の展望	JA浜中町 石橋榮紀	1. 浜中町酪農の未来 2. これからの酪農地域のあり方
8	6.14	無畜舎酪農と季節繁殖	清水町 出田基子	1. 出田牧場の歩み 2. 今後の経営
9	6.21	酪農地帯における畜産加工	白滝村 岡田ミナ子	1. 岡田牧場の歩み 2. これからの活動
10	6.28	酪農支援の取組み	JA鹿追町 中野松雄	1. 鹿追町の酪農状況 2. これからの展望
11	7. 5	酪農生産法人の歴史	卯原内酪農 白石康仁	1. 卯原内酪農生産法人の歩み 2. 法人経営の担い手
12	7.12	農業後継者支援策	道担い手センター 山下光治	1. 農業後継者への支援策 2. 新規就農に向けて
13	7.19	牧場の設計手順	中央会 船本末雄	1. 牧場開設にあたって考えること 2. 経営シミュレーション

注) 場所：C10教室。16：20～17：50

表2-1 「実践酪農学演習」授業内容 (2004年度)

週	月・日	講義テーマ	講師名	主な内容
1	9.27	ガイダンス・夏期実習報告	酪農大 干場・新名	1. 実践酪農学コースとは 2. 授業計画と過疎地域の事例
2	10. 4	土づくりと飼料生産	松中	1. 土壌の見方
3	10.18	牛の行動	森田	1. 行動観察 2. 管理の適否
4	10.25	BCSの見方	泉	1. BCSの見方 2. 栄養管理について
5	11. 1	サイレージの作り方と品質判定	名久井	1. 調整方法 2. 品質判定
6	11. 8	正しい搾乳手順	永幡	1. 泌乳生理・搾乳観察
7	11.15	牛舎施設と環境	干場	1. 環境適否 (換気・牛床・飼水槽) 2. これからの展望
8	11.22	乳検データの見方	新名	1. 乳検データの活用
9	12. 6	発情発見	堂地	1. 発情観察
10	12.13	酪農経営	荒木	1. 多様な経営
11	12.20	遠隔授業	寺脇	1. 機材利用について 2. インターネットの利用
12	1.17	農家実習の打ち合わせ	野・干場・新名	1. 注意事項 2. 遠隔授業の進め方

注) 場所：牛舎，ほ場およびD21教室。16：20～17：50

表2-2 「実践酪農学演習」授業内容 (2005年度)

週	月・日	講義テーマ	講師名	主な内容
1	9.26	実践酪農学コースの取り組みについて 実践酪農学演習の授業計画 夏期酪農実習の報告	酪農大 干場・新名	1. 実践酪農学コースとは 2. 授業計画と過疎地域の事例
2	10. 3	農場実習報告会	実践酪農学 コース2年生	1. 体験報告会
3	10.17	土づくりと飼料生産	松中	1. 土壌の見方
4	10.24	粗飼料の栽培と管理	義平	1. 栽培管理，植生・収量・施肥設計
5	10.31	サイレージの作り方と品質判定	名久井	1. 調整方法 2. 品質判定
6	11. 7	家畜の消化と栄養	岡本	1. 基本用語の意味
7	11.14	乳牛の行動と観察	森田	1. 行動観察 2. 管理の適否
8	11.21	正しい搾乳手順 乳検データの見方と利用	新名	1. 泌乳生理・搾乳観察 2. 乳検データ
9	11.28	繁殖管理のポイント	堂地	1. 発情観察
10	12. 5	牛舎施設と環境	干場	1. 環境適否 (換気・牛床・飼水槽) 2. これからの展望
11	12.12	酪農経営の見方	荒木	1. 多様な経営体
12	12.19	遠隔授業機材の使用法の習得	猫本	1. 機材利用について 2. インターネットの利用
13	1.16	農家実習の進め方	干場・新名 猫本	1. 注意事項 2. 遠隔授業の進め方

注) 場所：牛舎，ほ場およびD21教室。16：20～17：50

「非常に良かった」が10名、「良かった」が8名であり、ほぼ全員が満足していたと思われる。

「酪農家における実践学習」に参加しなかった学生の不参加を決めた理由(複数選択可)は、「酪農家で実習しながら学ぶのは大変そうだったから(自信がなかったから)」が5名、「他にやりたいことがあったから(資格取得以外で)」と「大学内で学ぶ時に、2年前期と3年後期に取れなかった分の単位を取るのが大変そうだから」がそれぞれ4名、「資格(教職・食品衛生管理者など)を取れなくなるから」が2名であった。その他の理由としては、「体力があまりにもない」、「大学にいたので、大学のうちにしか出来ないこと、興味ある無しに関わらず、色んな講義を受けたい」、「寮で役職に就いてしまったため、半年も実習に行くことはできない」、「実習先がどう決まっていくなか段階が見えない」があげられていた。

「酪農家における実践学習」に参加するか否かについて、「実践酪農学演習」を履修した学生と2度面談したが、参加しなかった学生も相当に迷った末の判断だったと見受けられた。1年後期において、自分の進路を真剣に考える機会があったことは、その後の学生生活に非常によい影響を及ぼしたものだと思われる。

3) 「酪農家における実践学習」参加者の感想

以下に、2005年度前期に初めて「酪農家における実践学習」へ参加した5人の学生の感想を示す。前述した「実践酪農学コース」のねらいが実現していると考えられる。

「私はこの実習で、自分がいかに酪農について何もわかっていないかを思い知りました。はじめはわからないことが多すぎて、焦りや恥ずかしい思いをたくさんしました。しかし、実習先の農家さんは優しく、酪農のことはもちろん、将来に役立つ多くの事を教えてくれました。また、実際に作業をしながら学校の勉強をすることで理解がしやすく、学んだことののみ込みが良かったです。この実習に行ったことは、自分にとってとてもプラスになりました。」

「実習先はけっこうな田舎で交通手段も自転車だったので、どこかに出かけたりとかいうことはほとんどなく、だいたい牧場内にいました。けれど、逆にそれはとても実習に集中できる環境だったのだと思います。起きて、仕事して、帰ってきて寝る。単調なことの繰り返しだったけど、感じることは日々違うし、なにより毎日の作業を通してゆっくりと自分が本当に酪農がやりたいのかどうかをよく考えることができました。」

「酪農という私たちの生活の中で欠かせない産業を中心に、たくさんの人に出会い、また多くの時間を農家の方々と過ごし、机の上では学ぶことのできない体験を肌で感じることができました。これらすべてのことを目で見、いろいろな人と話を交える中で、自分の将来を見据え、確かなものにしてくれたのがこの実習であると私は思います。」

「実践酪農学に参加した動機と目的は、教室での授業では習得できないものがあり私にはそれが足りないと思っていたためと、北海道で酪農の仲間を見つけたかったからです。私は実際に搾乳が牛に与える本当の影響がどの程度かを知りました。そのことを意識した作業と、それが充分でない作業がどういった影響を与えるかを受入農家さんのおかげで知ることができました。鹿追町は酪農が基幹産業で、そこで出会ったある農家さんは、共進会という牛のコンテストに熱心で、私はその方から家業に対するポリシーと、牛の改良をすることが一つの生きがいと楽しさにつながるということを教わったように思います。」

「僕は、4月から8月いっぱいまで鹿追町の伊藤和広牧場でお世話になりました。搾乳牛220頭、乾乳・育成牛が185頭おり、4名で管理されていました。牧草もコントラのため日中の作業はなく、朝と晩のみで、朝は3時半から8時、夕方は2時から7時まで、育成牛の管理と搾乳作業でした。この3か月間いろいろありましたが、技術などは少し上がったと思います。一番勉強になったのは酪農をやるにあたっての心構えや親方が今までやってきた中で何が重要だったかなどの技術以外のことで、実習に来て良かったと感じました。指導やお世話をしてくれた親方や奥さん、作業員の方々、本当にありがとうございました。」

4) 「酪農家における実践学習」参加者からの報告会とそれに対する同学年生の感想

2005年10月6日に、「酪農家における実践学習」参加者からの報告会に参加学生と同学年の2年生に対して実施した。報告者5人の内2名は、パソコンを用いて画像を見せながらの報告であった。

参加した142名の学生が感想を提出したが、ほぼ全員が5人の学生の「酪農家における実践学習」に、強い刺激を受けていたと判断される。以下に2人の学生からの感想を示す。

「まず、一番感じたのは「行けばよかった」という思いです。授業をとるかたらないかの時は、ただ単純にそんな長期間もする気はないと思っていたの

ですが、夏休み中の実習を経験して、酪農という職業に深く興味を持った私は、とても後悔しました。発表してくれた5人の方たちがとても素晴らしく見えてしまいました。自分は何をしていたんだろう、という思いもありました。私には20日間の実習が、すごく充実していて楽しくやりがいのあるものだったので、安易にそう思うのかもしれませんが、将来、そのような仕事に就くことが目標になった今、長期の実習はとても重要なことだと思います。自分もその経験をしたと、純粋に感じました。毎日の授業も、もっと大事にしようと思いました。今回の発表は私にとって、とても意味のある、考えさせてくれるものでした。みなさんありがとうございました。」

「農業をするにあたって大切なのは学よりも実践なんだと思う。「学」が大切でないということではないが、個人的な畜産のイメージは「机上の理論がすべてではない」ということ。例えば、テストで発情の牛の特徴を書かせたら100点満点をとるような人が、現場で発情の牛を見つけるといわれて見つけられないケースは大変多いと思う。酪農で扱うものは機械ではない。生き物なのだから勉強するだけでなく、肌で感じるのが大切だと思う。今回の実践酪農学で農家に行った5人も、現場のキビしさ、楽しさ等色々な面が知れたと思う。現場にふれながら勉強していくのはとても良いことだと思うし、これからも頑張っていって欲しいと思いますし、僕ももっと頑張ろうと思いました。」

4. 今後に向けての課題

1) 協力酪農家および受け入れ農協からの意見

2005年度前期の「酪農家における実践学習」期間中および終了後に協力酪農家を訪問し、本コースに対する意見を聴取した。以下に意見の要点を示す。

- ・3か月を越える実習を途中で投げ出すことなく、最後まで取り組んだ派遣学生の健闘を評価する。また、参加者がこの間に大きく成長した。
- ・真剣に学ぶ姿勢があれば知識、技術不足は全然問題がない。むしろ、中途半端な者より何も知らない者の方が対応しやすい。
- ・日常作業に対する認識に不十分な点があると思われる。
- ・1日のタイムスケジュールにおける学習時間帯のあり方について、検討が必要である。農家の作業を優先させて、学習時間帯を設定した方が、学習効果も上がると思われる。
- ・集中講義の日程の連絡をもう少し早めにして欲しい。

また、受け入れ農協からは、以下のような意見があった。

- ・酪農産業に実践力のある後継者を送り出すこのシステムは、絶対に間違っていないので、今後も継続すべきである。
- ・集中講義の時に地元酪農家も参加しているが、内容が難しすぎるものもあるので、出来るだけ現場の人たちが興味を持てる内容にして欲しい。

2) 2地区の受け入れ体制の相違

受け入れを協力してくれた浜中町と鹿追町の受け入れ体制の違いが話題にあがり、両町の差異が経営体の違いであることを認識させられた。つまり、浜中町の協力酪農家はいずれも家族経営で、経営と生活が密着した受け入れ体制(敷地内に設置されたトレーラハウスに居住)を基本とするのに対して、鹿追町は常時雇用体制を組み入れた企業の経営であるため、作業時間以外は自由時間で、貸与された車で町営住宅から通うという従業員に近い受け入れ体制であった。この両町の受け入れ体制の差異が派遣学生にとっては極めて貴重な体験になることをしっかり認識させなかった点も反省材料であった。

3) 改善項目の整理

上述した協力酪農家や受け入れ農協からの意見をもとに、今後の改善項目を以下のように整理した。

- ・あらかじめ「酪農家における実践学習」参加者に、まず協力農家のやり方を習得するように心掛けることを理解させる。
- ・学習時間帯については、協力酪農家の作業体系に合わせて設定する。
- ・集中講義の日程を早めに設定し、連絡の徹底を図る。
- ・集中講義開催日の夜に、現場が必要とするテーマについて話題提供をし、それについて議論する。

5. ま と め

酪農学科では、2004年度より、酪農場での実践を通して学ぶ新しい教育方式である「実践酪農学コース」を新たに開設しており、現在、3年目を向かえている。在学4年間の内、トータルで約1年間を酪農家で実践をしながら学び、本学の建学の精神・理念を体得し、即戦力となる人材を4年間で養成することが本取組の目的である。

3年目の現時点までの状況としては、1年次に大

学で学ぶ「実践酪農学」および「実践酪農学演習」に対する受講学生の評価は極めて高く、2年前期の「酪農家における実践学習」に関しても、参加学生・協力酪農家・受け入れ農協・地元役場がともに高い評価を与えた。

一方で、初めての試みでもあり、「酪農家における実践学習」参加学生の心構えや学習時間帯の設定などで課題も明らかとなり、それらの改善方策が検討された。

謝 辞

「実践酪農学コース」の実施にご協力をいただいている浜中町・鹿追町・足寄町の酪農家・農協・役場および本学の関係教職員に感謝する次第である。また、「酪農家における実践学習」に参加した、あるいは、現在参加している勇気ある学生の挑戦に心から敬意を表する。

なお、本研究の一部は、2005年度学内共同研究「酪農担い手育成・参入のための支援システムの確立研究」（代表・荒木和秋農業経済学科教授）の一環として実施したものである。

参考文献

- 1) 黒澤西蔵(1970)：酪農学園の歴史と使命，酪農学園大学。
- 2) 高井久光(1997)：デンマークにおける農業教育制度，酪農ジャーナル，1997.11.

SUMMARY

This is the third year since the Practical Dairy Science Course established as a program in the Department of Dairy Science, Rakuno Gakuen University. The Practical Dairy Science Course aims for students to learn through experiences of practical exercises at dairy farms for two semesters out of eight in four year program. The evaluation of this course from attended students, dairy farmers accepted the students and the agricultural cooperatives was extremely high. On the other hand some problems to be solved were revealed and the improvement plans were discussed.

